

日本中近世都市史研究の課題をめぐるエッセイ

一西洋日本学者の視点から (*)

マルクス・リュッターマン

はじめに

マックス・ウェーバーの「非正当的支配（都市の類型学）」(Die nichtlegitime Herrschaft [Typologie der Städte]) という論文は日本でも周知されている。原題では単に「都市」(Die Stadt) として 1921 年に公刊されたもので、現代の都市比較研究の出発点と言えるかもしれない。常に日本における学問的自覚のものさしとして使用されたウェーバーの論説だが、それより先に、西洋の史的自覚の土台を設けたヘーゲルに次いで揺がし難い学問的基盤を据えたものであることを忘れてはならない。しかるにそこでは中国の都市も日本の都市も西洋のその対比例として道具化されており、また西洋社会全体の合理的組織化に比して停滞し遅れているのがすなわちアジアそのものであるという認識がその歴史観の前提をなしている。よく知られているように、そういった文脈の中でウェーバーは、次のような結論を出したのである：要するに、中世近世の日本には都市共同体はなかったと。共同体員による裁判・政治への参与、また市^{いち}をめぐる自治その他の規準を満たすものはなかった。それに対していわゆる「座」はその萌芽に過ぎないと述べ、五人組や町奉行といった存在を都市民の被統治者的色彩の濃さを現わすものとして描いている。ちなみにそれとは逆に村落の自治共同体を原始的な現象としてとらえ、日本にその存在を認めたのである。ウェーバーの指摘に影響されたのか、柳田國男も日本の都市に市壁が欠けている点を強調し、さらに長期間を経た都市住民形成が見られないことを主張して、都市そのものが農村とさほど見分けがつかないとさえ『都市と農村』の中で言及している。それはともあれ、ウェーバーの結論は大いに役立ったものの、多くの研究成果によって内容的にはほぼ完全に否定されるべき段階に至った。私たち西洋の東洋史学者は日本の研究成果を参照し自主的な研究を重ねる中で、おおまかに言えば三点の改善を目指している。一つは、中国や日本などの地域を必ずしも合理化過程の対比例として位置付けないこと。二つ目は、都市の在り方または近代化を単にいわゆる自治ないし共同体としての政治形態のみに限定して観察・分析しないこと。最後に異文化の言葉・比喩・記号を通じていかなる生活形態が自ずから見えてくるか細かく浮き彫りにすること。以上三点が東洋史学者の日本の都市への問題関心の

* 文中に〔 〕で各問題点について参照した日本及び英語・ドイツ語圏の日本学・東洋史学での主な論者を示し、末尾に文献表をまとめた。

柱であると言ってよい。未熟ながらドイツ人の日本史研究者という私の視点から、以下、都市史研究に関して何を問題点ととらえ、研究史の動向をどう観察しているか概述を試みたい。

1. 非農業的生活の場

日本の都市的場は住民集中が著しい。すでに平城京の人口は2万人に至ったと言われる。十五世紀の京都は15万、十七世紀には大阪と並んで40万人に上った。堺市の人口は十六世紀に2~3万人に至り、博多は5万までに達した。奈良、桑名、大湊などは5千から1万5千人ほどであり、江戸時代に入ると広島のような城下町は6万人、金沢・名古屋は10万人、そして江戸は世界最高の100万人に上ったとはよく知られているところである。それらの事例を見ただけでも量的には農村的色彩をはるかに乗り越えた場が各時代を通じて存在していたことは想像に難くない。平城京や平安京のような首都はさらに都市計画の芽生えも意味し〔鬼頭清明、McCullough〕、日本人の地理意識に現代まで強く影響を及ぼしていることも、われわれ西洋人の学者には興味深く感じられるのである。それら首都では十六の町が「坊」となり、また四つの町を「保」としてまとめ、内裏のようにいずれも都市的場を四角いものと意識させ、すなわち中国における和平された地の形の理想を汲んでいた。それによれば内裏の南正面にある朱雀門つまり南の星座が象徴する神がいわば権力・政策を「指南」するのである。また中国の行政体験を受けて福田思想にもとづく悲田院・施薬院などを含めて堂々とした中央公権力の城が早い時期に成立したにもかかわらず、そういった思想的影響に社会現状が仲々追いつかなかったことが日本の特徴の一つである。面白いことに平城京に次いで平安京もまた本州の中央権力自体も各時代において日本の歴史を代表するようにその核心が西から東へ移動した。すなわち条坊の枠外に市や官衙町が設けられ、公家などの屋敷面積制限が破られ、悲田院などが衰退し、律令国家が理想に沿って展開したのではなくむしろ自発的な動きが起こった。その在り方は原田伴彦や豊田武の総括的あるいは類型的研究によって明らかにされているし、考古学によっても裏付けられている〔佐久間貴士など〕。さらに三都（鎌倉、奈良、京都）以外に、寺内町・門前町・城下町のような支配権力の場、交通関係都市・宿駅関係都市・港町のような商業の場に加えて、あらためて具体的に中世初期の府中所館の権力の場、市・津・湊・関所・宿・浦・泊のような商業的な場または寺院の僧侶の町などをいずれも都市としてとらえられるようになった〔義江彰夫〕。それらの存在はそもそも流動的であったとしても、十六世紀からは位置も比較的安定するようになった。その流れの中で、天守閣のもとで城下町が町割制度をへて条坊を模倣し、大手門が朱雀門に倣うというように古代都市思想が近世に適應されてきたことが見られる〔Laumeyer、McClain〕。また河原者と言うように被差別職人また貧者（非人）が格別辺境地に除外されたとすでに原田が指摘している。近世の代表的な例としては塚田孝が大阪の渡辺を研究している。しかし、以上のように都市類型・都市計画の豊かな日本歴史は戦後までは西洋の学界ではほぼ知られず、最近主に米国の研究者によって紹介されるようになった。われわれの関心の一つは古代から近世にかけての連綿性と質的な変容である。西洋における最新の

近代日本の都市計画についての研究がその歴史をいまだに無視している問題は未解決であると言わざるを得ない。

2. 社会構成

十世紀以降の歴史はどの地域でも、多かれ少なかれ、律令的計画やその根底にあった理想と現状との綱引きであったように見える。それを物語るのが例えば舍人のような豪家の存在である。都に仕える彼らが非合法的に増えてしまい、公的官僚以外にいわゆる「公家」と私的關係を結び身分特権とともに免税を許された。この類の取引の妥協的成果がのちほどの史的展開の模範となったと言っても過言ではなかろう。つまり彼らに次いで供御人・神人・寄人・雑色などの身分を獲得した輩が、多く地方に根拠地を持ったまま暫定的に在京した〔網野善彦〕。基本的に百姓身分に伴う負担を免ぜられた彼らは領主に対して特定な役を奉仕したのである。彼らとは別に京都や地方都市に定住していた納税者としての商人手工業者が在家役や地子または屋地子をおさめ、長く在京し始める供御人・神人などとともに特定な都市民身分を作り出す。特権的な身分を帯びていた後者は時代とともに特定な負担を重ねたし（例えば寄宿）、よく知られるように間口尺別など十四世紀以降の新しい課税方法が生まれてきた。その枠内に差別視を受ける奉仕者も現れたのであり、キヨメをはじめとして屠家または刑執行者がエタとも呼ばれ、不潔と思われる血・死にかかわる業で生計を立てた芸者や非人などとともに散所を居住地にしたことから、いわば枠外の流民と見分けがつきにくくなってしまった〔大山喬平、黒田俊雄〕。戦国時代になっても以上のような身分構成は基本的には揺るがなかった。中世の領主にかわって今度は大名のもとで有名な地子免徳政令の免除の例が相次ぎ〔脇田修〕、都市納税者と奉仕役を負担する特権身分の実態が近づいていったが、十六世紀の末には最終的に士・農以外の都市住民を町人足役負担者と特権身分の御用商人との形でとらえることで〔吉田伸之、McClain〕、旧体制が城主幕府によって受け継がれ保たれた。そしてそれらの負担者以下で奉公人・手間取り・日雇いの労働者たちが都市に流れて残ったりまた地方へ帰ったりする動きがあったし、豪商の誕生や米市場に収入を左右される士の状況も社会の流動性の側面をなした〔Rozman、Hirner〕。凶作などの場合その労働者は社会問題となり御救いの対象となったのに対して〔吉田伸之、Leupp〕、貧者に関しては、堺にあったような悲田寺や江戸に設けられた小石川薬園のような療養所がいかなる機能を果たしたか、十分に明らかにされていないように見える。近世の皮問屋をはじめとしてカワタなどの被差別的地位が一段と厳しくなったことは周知であるが、それが都市史においていかなる役割を果たしたかはいまだ十分に西洋に紹介されてはいない。

3. 経済

三世紀にまとめられた『三国志』中の『魏志』によれば日本列島には市^{いち}が散在していた。もちろん古代を通じてその存在は認められる。中世にはいつて、四日市・八日市など地名にの

こるようにその頻度が高まり、またその場の定住度も高まりつつあった。そしてよく知られるようにさらに六斎市が現れた。それにもなって金融業も発達し、利子を取る行為も基本的には宗教観念によって制限されることはなく、大体一割の利子分が普通であった。幕府や一揆また大名もそれぞれ御家人・仲間・家来などを保護し、商業税の対象ともなった金融業者たる土倉・酒屋・問屋の所有権を揺るがせ [脇田晴子]、徳政の名目の元で返済を否定する政策を打ち出したのが日本経済の特徴の一つと思われる。ところでいわゆる座という組織はいかにも西欧のギルド制に類似していると言えるかもしれないが [豊田武、Yamamura]、その本質がはたして同一のものか、あらためて比較する余地はあろう。十一世紀以来座（語源は不明）において納税者の集団が業種ごとに専売権・公道の独占通行権を領主から得たように何よりも特権の共用者組織であり、また下請けに対して許可を下す文字どおりの支配組織であった。確かに旧式の座組織は中世の領主という立場が弱くなるにつれて衰え、十六世紀の織田信長や羽柴秀吉による楽座令によって一旦解体したものの [脇田修]、新しい公権の成立次第復活した。ために銀座・金座というように特権営業者は依然として座と呼ばれることが多かった。また鳶口をはじめとして多くの日用取りの斡旋を業とする日用頭もまた座という組織を生み出した。それと並んで幕府に対して揚銭を納め特権を握りつつ下職を支配する有名な株仲間が成立した。つまり株というのは（木の根本を意味する通り）収入権・営業権・参与権であって、質の対象にもなり売買の対象にもなり得た。その具体的な例として吉田伸之が髪結い仲間や飛脚仲間の在り方を解明している。カワタの支配下にあった大阪の渡辺も同様な構造をとっていた。そこでは被差別民の下層の営業者が公道の端にあった小便担桶を管理し尿の農家への専売権をもっており、売り上げを高めたゆえに隣町との摩擦が起きて専売をめぐる訴訟問題へと発展した [塚田孝]。それらの事情からも、さらに為替取引・両替屋の欠くべからざる近世社会の在り方を見ても、人間関係における貨幣経済の浸透が著しいことがわかる [Sheldon]。そこでわれわれ西洋の学者にとって依然として謎であり解明が待たれている問題は、958 年と 1587 年の間、日本には鋳銭は確認されるものの公な貨幣鑄造所は存在しなかったことである。唐銭・宋銭の流通や中世における日本の中央公権力の弱体化に関連しているのかもしれないが、西欧では王権をはじめとして少しずつ異質の公権力または都市に委譲された鑄造権の重要性を考えれば、非常に興味深い比較史的テーマの一つであろう。

4. 思想

日本においていかにして都市的な場の思想の世界が誕生したかは、特に近代化論の視点から西洋の学者の関心を惹くところだ。十一世紀以降の公家日記（例えば『中右記』）また絵巻物をはじめとした絵画史料が多彩な雑人の祭祀文化を垣間見せている。その一例として三条京極の京極寺の御輿巡行が指摘されている [戸田芳実]。十四世紀から生成した祇園祭 [脇田晴子] が十六世紀に遠江の国の見付宿場町に伝わるように [義江彰夫]、ある種の市民文化は中世を経て畿内を越えて普及した。それを土台に幕末のええじゃないか踊りがほぼ全国的に拡がり、

都市民自身の改革思想の表われではなかったものの為政者によって道具化され得るほどの基盤ができていたことがまず注目に値する〔南和男、Zöllner〕。

十分に解明されるべき問題としては、例えば遊廓文化の形成と被差別民の町または部落の存在がある。「性（せい）」や「穢れ」が道徳的に峻別されたことは社会史的にも思想史的にも徹底的な共同研究を要する。例えば「性」については、女子用往来物の多くまたは『嫁娶重宝記』における教育に触れる箇所を参照すれば七歳より男子女子を分けて食事をさせるなど、儒教の礼記などの教説に従って庶民文化にまで厳しい道徳規範が浸透しつつあったように見うけられる。同じく一般的に男女の間で「ねんごろ」の文を交わすことも退けられ、武家・町人いづれにおいても家と結婚とが離れがたく結び付き、旧習たるヨバイ（よびこみつづける→夜這う）および近世的な雑魚寝に対して男と女との直接的な出会いの場を否定し、仲人の役割が不可欠とされた。畢竟非形式的な性交際は特別な市場・空間を必要としたという展開が、遊廓の繁栄によっても裏付けられるかもしれない。風俗の特別扱いを克服して正統派学問の域内であと一歩考察が進められるべき分野であろう。

さて、各都市で鎌倉時代から浄土思想または日蓮宗の法華経崇拜の普及が如法経堂を中心に共同体の連帯感を強め、他の共同体との競争関係におけるアイデンティティを支えた。その中に都市的な色彩を見出すことも一つ課題であろう。言うまでもなく江口・神崎のように白拍子または傀儡の集う港町を基盤にある種の今様歌が十世紀から十四世紀の間にはやり、『梁塵秘抄』のように公家や天皇までがそれを記録した。同じく『職人歌合』といった史料には、公家の遊びというフィルターを通した形で庶民文化が描かれている〔Schneider, Vollmer〕。しかしながら十五～十六世紀にはいつて猿楽・能の蒐集のうえに都に独特の地下人思想が現れ始める。世阿弥によって体系化された「ナマメク」や「ユウゲン」はある意味においてその新しい段階を代表するものだった。同様に茶道の「ワビ」や「サビ」は、あらためて登場する村田珠光・武野紹鷗・千利休に代表される奈良・堺・京都の都市民の美意識とともに政治的な意味合いの込められた生活主張であったと思われる。それらの受容は古今伝授の地下派（牡丹花肖柏と林宗二）に見られるような歌学美意識の普及を前提としていた。ちなみに古今伝授をはじめ、秘伝の公開化は近世の都市民的思想がもたらした現象であった〔Rüttermann〕。その延長線において歌舞伎や浄瑠璃のような劇が江戸時代の町衆の娯楽にとどまらない思想の場を形成したと言える。見立てという間接的な方法を取ったものの政治的な事柄も舞台に上り、世論に影響を及ぼした。草双紙など文学の普及が度を増すさなか、劇がまた散文として販売され得るほどの人気を呼んでいたという興味深い事情は、ドイツの日本学者エッケハート・マイ〔May〕により明らかにされている。事例は枚挙の暇がないが、例えば江島屋其蹟や十返舎一九が潤筆料を稼ぎ滑稽本などを書くことを通じて生計を立て得た。そういった現象を前景に、日本学者がいまだほぼ着手していない分野である夥しい数の教養書・実用書も加えた広義の文学世界が、すなわち都市の文字文化であったと言えよう。いわゆる往来物（狭義の書簡模範書も道徳教訓書も含む）・調法記＝重宝記・節用集＝節要集また鑑・宝袋・箱・教・訓などがまず京都、大阪、

江戸をはじめとした都市において刊行され、その多くはいわゆる町方の民・女房・児童を読者としていた。寺子屋の書物もあれば [Dore] 手工業の専門的な文献も家内参考書としての機能を果たすものもあった。もちろん町衆の俳諧文学も商家（三井家など）ではやった家憲・家訓も無視できない。さらに躰・礼法関係の規範書の普及が進み [Ikegami, Kracht, Kinski]、瓦版や聞き書きと称する初期的な新聞も現われ、のちほど新聞にその名称をのこした読売もそれぞれ文字社会の進化を物語るのである [Linhart, Köhn]。そういった読者・教養層の新興によって、いわば氷山の頂上たる講義文化や学問の進化が支えられていた [Rubinger]。例えば松永貞徳・堀景山の和学や歌学、伊藤仁斎の古義学、契沖の言語学、海保青陵の経世学、井上金峨の折衷学など [Najita / Scheiner (eds.)] も近世都市の社会的基盤なくしては栄えなかったとは大いに想像し得る。それに加えて、荷田春満・賀茂真淵・本居宣長そして平田篤胤の国学思想が受講者の日本人としての連帯感に貢献し得たのも [Harootunian, Nosco]、都市的場の条件にその一因を負っていたのではないか。最後に心学を取り上げなければならない。その開祖石田梅岩（勘平）は京都の車屋町で講堂を建て私心無きところを説き、商人の社会的機能や地位を論じ、公な道の一つとして体系化した [Thonak, Bellah]。例えば『都鄙問答』では、「売利を得るは商人の道なり」、それを通じてアキンドが「天下の治る助けとなる」と説いている。言うまでもなく幕府・各藩の政府の軽視と懷疑を受けていた商人の間で、そういった自主性を強調する思想は人気を集めた。それは手島堵庵らの講義活動でも明らかである。そして商人層は反幕的な色彩を帯びるよりはまず天下に積極的に貢献する立場として自ずからを把握した。それこそは日本史における合理化過程の一種としてとらえ得るし、その視点も含めた研究が進められ、これから西洋にも大いに紹介されることを期待している。

5. 政治

平安時代の都市統治に携わったのは京職や 810 年に設けられた検非違使庁であった。史料形態が限られており詳しいことはほとんどわからない。十二～十三世紀、初めて庁に所属する在地管理人として刀禰が現われる。つまり都市民の有力な者が保ごとに置かれて在家役を徴収する職である。刀禰の管轄下にある納税者の姿は、わずかに津料を否定するような訴訟問題を例におぼろげにしか把握されない。十五世紀以降初めて町共同体は史料に浮かんてくる。個々の家単位の代わりに集団としてまとまった料金を納めいわゆる地下請けを行なったのがその側面の一つである。堺はその有名な例であって、さらに守護に対して不入権や検断権も獲得した上、またとない高度な自治権力を生み出した。すでに十六世紀の宣教師によってベニスと並び称されている。すなわちガスパール・ヴィレイラは 1561 年にその都市が多くの商人からなること (e de muitos e grosos mercados) を報告し、その年寄 (senhoria) がベニスのように会合衆に政治をまかす (se rege por regedores como a de Venesa) と述べている。またその共同体の政治目標はあくまでも互いの和合 (concordia entre todos) であったという [Ruiz-de-Medina (ed.)]。秋山国三の研究によって解明された京都の町組は十六世紀には堺に近いありさまであった。町が

年寄行事を町組の月行事に送って重要なことがらを「汁」という寄り合いで談合し置文や掟を発行しており、その烏帽子着・入道成り、鍛冶屋・材木屋・芸人などの定住禁止をめぐる条目などを見れば内容豊かな町共同体の実情が伝わってくる。その中で例えば決定法のひとつとして「多分に従う」という原則さえ認められる。「然り」と「然るべからず」のいずれかを選択してなるべく多くの支持者をもって合点するのがその狙いである。寺院の共同体に倣って十六世紀までに世俗の共同体がそういった決定法を身につけたことは実に興味深い。賛成反対の決着を票にあたる「点」の数に応じてはっきり定めた規則さえ認められ、おぼろげな「多分」ばかりではなかったに相違ない [Rüttermann]。以上のような町共同体は豊田武・網野善彦などの研究で数多く紹介されている。大湊・桑名・宇治・博多・長崎などにおいて会所に地下を代表する老若が集い自分の場を公界と称した。それは戦国時代にふさわしいスローガンでもあり、いわば *Reichsunmittelbarkeit* のような、天皇内裏に直属するかのような主張である。それが公儀によって承認されたかどうかは議論の対象であろう。江戸時代になると、公な共同自治は原則として一切認められなかった。だからと言っていわゆる自治が行なわれなかったと考えるのもまた性急である。大山崎は神領と指定され、神人の系譜をひくいわゆる社家・社僧が離宮八幡宮の名目を借りて無高の田地を管理していた。その惣中として六人の当職人を選定して各保に指示を出した。惣中の離宮八幡宮は京都の所司代と比較的ゆるやかな関係に置かれた [今井修平、脇田修]。それに似た例として「株」の権利の持主であった富田林の酒造業者がある。彼らは庄屋という被統治者の代表を輪番で出した。ただし周知のとおり惣年寄などという町人の共同体は町奉行の支配を受け、鎌倉時代の刀禰のように今度は町肝煎り（仲介役）のもとに置かれた。町触れを受けて実施に当たり、税を徴収し、不動産の売買・譲渡を管理し、防火と道の整備などにあたった [Hall、McClain]。そういう条件の中で町人が町奉行を追い払い、公儀に対して反発したことさえあった。例えば新潟では 1767/8 年、騒動が起きて二ヶ月にわたって町人の自主的経済政策（物価や質の利子の切り下げ）が進められた。もちろん最終的に公儀によって弾圧され終息している [原田伴彦、White]。要するに日本近世の自治は公認を受けずにとどまってしまう、都市共同体の指導層が公認された自由と自治を味わうことは依然として無かった。

結語

停滞する東洋史という思い込みがヨーロッパの自尊心を高める機能を果たすことはもはやありえない。ウェーバーがいまだ十分に視野に入れることのできなかった日本都市の諸側面について見れば、次のようにまとめられようか。日本の税制・法律・開発・社会層・身分・経済組織の各々の分野の展開は停滞よりむしろ目覚ましい前進または多様化を見せていた。非農業的経済もしくは生活基盤の上に暮らしている住民の場として、日本古代より多彩な形態が展開し、現代の概念の「都」および「市」という枠をはるかに越えた体制が生まれて定着した。中世の供御人・神人・雑色または寄人をはじめとして徳川時代の各藩の御用商人のような特権身

分、一般的な都市納税者としての町人身分、奉公人身分の形成、人夫・日雇い層の成立、特定の職人の道徳的差別、救貧施設、営業形態、家としての商家の意義、座および株仲間、下請けの制度、お茶や能楽・浄瑠璃・歌舞伎という公のコミュニケーションの場、草双紙のような大衆文学の公の議論、往来物や寺子屋にあらわれる市民教養の高揚ないし読み書きの標準化（仮名遣いを含めて）、あるいは調法記・節用集を通じた都市民の知識や礼法の普及、講堂における学者の活躍、これらはそれぞれに日本都市史研究の不可欠な領域を提供している。また特定の都市像とそれに伴う日本の公民の特質を垣間見せる文化の側面をなしている。それらについて言えば、ウェーバー後の都市史研究及び東洋史研究の成果は実に幅広く展開してきたのである。

ウェーバーの問題関心に少し戻ってみれば、次のように簡単に総括できよう。都市民の指導層は政治的権威者への恭順交渉ならびに同等な共同体との競争を通じて、遅くとも十五世紀以降文字文化を身につけ統治手段を覚えた。また仏教僧侶集団の思想・儒教的学問・貴族社会の歌論および国学の研究を経て多面的な文化・経済・政治思想を学習した。「町」「町組」「保」その他の地域的公権の単位の共同体が中世近世にわたって存続し、いわゆる自治も行なっていた。多くの掟類置文類が示すとおり、寺院公家に学んだ詮議・衆会・談合の技術、訴訟方法、最良のない裁決原理、多数決原理その他の概念を取り込みまた自分なりに展開したことが、日本の都市共同体の特色の一つである。その一方で、戦国時代において大名権力が近畿地方をはじめ各地で地子免をはじめとして自検断不入権まで否応なしに（慣習的に文書用語の「永久」または「永く」）認めたのは事実ながら、実際にはそれらの特権は戦時に強く制限されており、決して総括的な公権支配の公認を意味しなかった。徳川時代に入っても実質的な共同体統治は存在しても公権による公認はありえなかった。ましてや都市的場のレベルを越えた市民議会あるいは身分代表をもって大名や幕府へ貢献した制度は作られず、身分契約のような国家運営全体の財政を支える施設も形成されなかった。さらに地中海世界のような古代にさかのぼる都市理想もなく、ヨーロッパのルネッサンスに典型的な都市描写 *descriptiones urbium* や都市讃歌 *laudes urbium* に顕されたプライドの高い都市精神はいまだ見当たらない。

文献一覧

秋山国三『公同沿革史』京都市役所内公同組合総合会事務所、1944年（再版 法制大学出版局、1980年）

秋山国三、仲村 研『京都「町」の研究』法制大学出版局、1975年

網野善彦『日本中世都市の世界』筑摩書房、1996年

——『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店、1984年

——『無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』平凡社、1978年

今井修平「近世大山崎離宮八幡宮領の構造 中世都市共同体の近世的変貌」『ヒストリア』第97号（1982年）、41-56頁

大山喬平『日本中世農村史の研究』岩波書店、1978年

河音能平『中世封建社会の首都と農村』東京大学出版会、1984年

- 鬼頭清明「都市の概念と国府」『国立歴史民俗博物館研究報告』第20号（1989年）、180-186頁
- 『日本古代都市論序説』法制大学出版局、1977年
- 黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店、1975年
- 佐久間貴士「発掘された中世の村と町」『岩波講座日本通史9（中世3）』岩波書店、1994年
- 高橋康夫、吉田伸之・編『日本都市史入門』全三巻、東京大学出版会、1989-90年
- 中世都市研究会・編『都市の求心力 城・館・寺（中世都市研究7）』新人物往来社、2000年
- 塚田 孝『近世の都市社会史 大阪を中心に』青木書店、1996年
- 戸田芳実『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、1991年
- 豊田 武『座の研究（豊田武著作集第1巻）』吉川弘文館、1982年
- 『日本封建都市』岩波書店、1952年
- 原田伴彦『近世都市騷擾史』思文閣（京都）、1982年
- 『中世における都市の研究』大日本雄弁会講談社、1942年
- 『日本封建都市研究』東京大学出版会、1957年
- 林屋辰三郎『中世文化の基調』東京大学出版会、1953年
- 比較都市史研究会・編『都市と共同体』（上・下）名著出版、1991年
- 松尾剛次『中世の都市と非人』法蔵館、1998年
- 松本四郎『日本近世都市論』東京大学出版会、1983年
- 南 和男『幕末都市社会の研究』塙書房、1999年
- 柳田國男『都市と農村』朝日新聞社、1929年（定本柳田國男集第16巻 筑摩書房、1969年）
- 義江彰夫「国府から宿町へ 一の谷遺跡を手懸りに見る中世都市見付の構成と展開」『東京大学教養学部
人文科学科紀要第87輯 歴史と文化 XVI 歴史学研究報告第20集』（1988年）、117-246頁
- 「中世前期の都市と文化」『講座日本歴史 第3巻（中世1）』東京大学出版会、1984年、
207-252頁
- 吉田伸之『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、1998年
- 脇田 修『日本近世都市史の研究』東京大学出版会、1994年
- 脇田晴子『日本中世都市論』東京大学出版会、1981年
- Barth, Johannes (1969): *Kamakura. Die Geschichte einer Stadt und einer Epoche*. Tōkyō: Japanisch-Deutsche Gesellschaft.
- (1979): *Edo. Geschichte einer Stadt und einer Epoche in Japan*. Tōkyō: Japanisch-Deutsche Gesellschaft (Beibd. 1981).
- Bellah, Robert N. (1957): *Tokugawa Religion. The Values of Pre-Industrial Japan*. Glencoe, Ill.: Free Press.
- (1978): Baigan and Sorai. Continuities and Discontinuities in Eighteenth Century Japanese Thought. In: Najita / Scheiner 1978: 137-152.
- Blau, Hagen (1964): *Sarugaku und Sushi. Beiträge zur Ausbildung dramatischer Elemente im weltlichen und religiösen Volkstheater in der Heian-Zeit unter besonderer Berücksichtigung seiner sozialen Grundlagen*, Studien zur Japanologie v. 6. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Classen, C. J. (1986, 2nd ed.; 1st ed. 1980): *Die Stadt im Spiegel der Descriptiones und Laudes urbium in der antiken und mittelalterlichen Literatur bis zum Ende des zwölften Jahrhunderts*. Hildesheim et al.: Georg Olms

Verlag.

- Donath-Wiegand, Margarete (1963): *Zur literaturhistorischen Stellung des Ukiyoburo von Shikitei Samba*, Studien zur Japanologie v. 5. Wiesbaden: O.Harrassowitz.
- Dore, Ronald P. (1965): *Education in Tokugawa Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Dumoulin, Heinrich (1943): *Kamo Mabuchi (1697-1769). Ein Beitrag zur japanischen Religions- und Geistesgeschichte*, Monumenta Nipponica Monographs v. 8. Tōkyō: Sophia University Press.
- Ehmcke, Franziska (1992): *Die Wanderungen des Mönchs Ippen. Bilder aus dem mittelalterlichen Japan (Ippen hijiri'e)*. Köln: DuMont.
- Ehmcke, Franziska / Shōno-Sládek, Masako (1994): *Lifestyle in der Edo-Zeit. Facetten der städtischen Bürgerkultur Japans vom 17.-19. Jahrhundert*. München: iudicium.
- Ennen, Edith (1987): *Die europäische Stadt des Mittelalters*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht (4th revised ed.; 1st ed. 1972).
- Haas, Hans (1910): *Amida Buddha - unsere Zuflucht. Urkunden zum Verständnis des japanischen Sukhāvati-Buddhismus*. Leipzig.
- Hall, John Whitney (1968): The Castle Town and Japan's Modern Urbanization. In: Hall / Jansen (eds.) 1968: 169-188.
- (1981): *Japan Before Tokugawa. Political Consolidation and Economic Growth, 1500 to 1650*. Princeton, N.J.: Princeton UP.
- (1988): Kyoto as Historical Background. In: Hall/Mass (eds.) 1988: 3-38.
- Hall, John Whitney / Jansen, Marius B., eds. (1968): *Studies in the Institutional History of Early Modern Japan*. Princeton, N.J.: Princeton UP.
- Hall, John Whitney / Mass, Jeffrey P., eds. (1988): *Medieval Japan. Essays in Institutional History*. Stanford, Cal.: Stanford UP (new ed., 1. ed. Yale UP 1974).
- Hanley, Susan B. / Yamamura, Kozo (1958): *Economic and Demographic Change in Preindustrial Japan, 1600-1868*. Princeton, N.J.: Princeton UP.
- Harootunian, H[arry] D. (1988): *Things Seen and Unseen. Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Hauser, William B. (1974): *Economic Institutional Change in Tokugawa Japan. Osaka and the Kinai Cotton Trade*. Cambridge: Cambridge UP.
- Hennemann, Horst: *Chasho. Geist und Geschichte der Theorien japanischer Teekunst*, Veröffentlichungen des Ostasieninstituts der Ruhr-Universität Bochum v. 40. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Hirner, Andrea Christine Therese (1979): *Feudales Leben in der japanischen Stadt. Charakteristiken und Entwicklungsformen der kakyūbushi in der Edo-Zeit bis zum Beginn der Meiji-Epoche*. Bonn: Philosophische Fakultät der Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn (Diss.).
- Hohn, Uta (2000): *Stadtplanung in Japan. Geschichte, Recht, Praxis, Theorie*. Dortmund: Dortmunder Vertrieb für Bau- und Planungsliteratur.
- Ikegami, Eiko (1989): *Disciplining the Japanese. The Reconstruction of Social Control in Tokugawa Japan*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. (Diss.) / Ann Arbor: UMI.
- Institut für Asienkunde / Seminar für Sprache und Kultur Japans, Universität Hamburg, ed. (1990): *Osaka*.

- Porträt einer Wirtschaftsmetropole*. Hamburg: Landeszentrale für politische Bildung (2nd revised ed.)
- Jansen, Marius B. (1989): Japan in the Early Nineteenth Century. In: id. (ed.) 1989: 50-115.
- , ed. (1989): *The Cambridge History of Japan* v. 5, *The Nineteenth Century*. Cambridge: Cambridge UP.
- Jansen, Marius B./Rozman, Gilbert, eds. (1986): *Japan in Transition. From Tokugawa to Meiji*. Princeton, N.J.: Princeton UP.
- Kinski, Michael (2001): Basic Japanese Etiquette Rules and Their Popularization. Four Edo-Period Texts Transcribed, Translated, and Annotated. In: *Japonica Humboldtiana* 5: 64-123.
- Köhn, Stephan (2000 / 2001): Die genretheoretische Einordnung von Katastrophendarstellungen. Der Weg zum Konzept eines Genrebegriffes. In: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens / Hamburg* 167-170: 105-136.
- Kohsaka, Shiro / Laube, Johannes, eds. (2000): *Informationssystem und kulturelles Leben in den Städten der Edo-Zeit*, Symposium München 11.-14. 10. 1995, Okamatsu Bunko - Japanwissenschaftliche Beiträge zur interkulturellen Kommunikation v. 3. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Kornicki, Peter (1998): *The Book in Japan. A Cultural History from the Beginnings to the Nineteenth Century*, Handbuch der Orientalistik 5th Section. v. 7. Leiden et al.: Brill.
- Kracht, Klaus (1980): Book Review on Najita / Scheiner 1978. In: *The Journal of Japanese Studies* 6 / 2 (Summer): 331-353.
- (1985): *Studien zur Geschichte des Denkens im Japan des 17. bis 18. Jahrhunderts. Chu-Hsi-konfuzianische Geistdiskurse*, Veröffentlichungen des Ostasien-Instituts der Ruhr-Universität Bochum v. 31. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- (1998): Anstand und Etikette. Ein Forschungsgebiet. Erster Teil. In: *Japonica Humboldtiana* 2: 5-58.
- (1999): Anstand und Etikette. Ein Forschungsgebiet. Zweiter Teil. In: *Japonica Humboldtiana* 3: 5-48.
- Kracht, Klaus, ed. (1988): *Japanische Geistesgeschichte*, Japanische Fachtexte v. 3. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- , ed. (2000): *Japanese Thought in the Tokugawa Era. A Bibliography of Western-Language Materials*, Izumi v. 6, Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Kracht, Klaus et al. (1974): Kyūō dōwa. Predigten des Shibata Kyūō (1783-1839). Ein Beitrag zur Lehrpraxis der späten Shingaku. In: *Ostasienwissenschaftliche Beiträge zur Sprache, Literatur, Geschichte, Geistesgeschichte, Wirtschaft, Politik und Geographie*: 238-320.
- Laumeyer, Hans Dieter (1974): *Begriff und Strukturen der "Kinsei-Jōkamachi" als repräsentativer Typus der vorindustriellen Städte Japans. Dargestellt am Beispiel Sendai*. Bonn: Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität (Diss.).
- Leinss, Gerhard (1995): *Japanische Anthropologie. Die Natur des Menschen in der konfuzianischen Neoklassik am Anfang des 18. Jahrhunderts. Jinsai und Sorai*. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Leupp, Gary P. (1992): *Servants, Shophands, and Laborers in the Cities of Tokugawa Japan*. Princeton, N.J.: Princeton UP.
- Linhart, Sepp (1995): Kwaraban. Die ersten japanischen Zeitungen. In: *Buch und Bild als gesellschaftliches Kommunikationsmittel in Japan einst und jetzt*, eds. Susanne Formanek / Sepp Linhart, Wien: Literas 1995: 139-166.
- May, Ekkehard (1974): Autoren, Leser und Verbreitung der Kanazōshi. In: *Ostasienwissenschaftliche Beiträge*

- zur Sprache, Literatur, Geschichte, Geistesgeschichte, Wirtschaft, Politik und Geographie: 104-121.
- (1978): Bedingungen und Aspekte eines neuzeitlichen Literaturbetriebes im Japan des 17. Jahrhunderts. In: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung* 1: 272-284.
- (1983): *Die Kommerzialisierung der japanischen Literatur in der späten Edo-Zeit (1750-1868). Rahmenbedingungen und Entwicklungstendenzen der erzählenden Prosa im Zeitalter ihrer ersten Vermarktung.* Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- (1992a): Saiken. Die Führer zum Yoshiwara-Viertel in Edo. Geschichte und Gestalt. In: *Nenrin - Jahresringe. Festgabe für Hans A. Dettmer*, eds. Klaus Müller et al., Wiesbaden: O. Harrassowitz: 106-126.
- (1992b): Bestseller und Longseller in der Edo-Zeit. In: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens / Hamburg* 151: 17-26.
- McClain, James L. (1980): Castle Towns and Daimyo Authority. Kanazawa in the Years 1583-1630. In: *The Journal of Japanese Studies* 6 / 2 (Summer): 267-299.
- (1982): *Kanazawa. A Seventeenth-Century Japanese Castle Town.* New Haven / London: Yale UP.
- McClain, James L. et al., eds. (1994): *Edo and Paris. Urban Life and the State in the Early Modern Era.* Ithaca / London: Cornell UP.
- McClain, James L./Wakita, Osamu, eds. (1999): *Osaka. The Merchants' Capital of Early Modern Japan.* Ithaca / London: Cornell UP.
- McCullough, William H. (1999): The Capital and Its Society. In: Shively / McCullough (eds.) 1999: 97-182.
- Najita, Tetsuo/Scheiner, Irwin, eds. (1978): *Japanese Thought in the Tokugawa Period.* Chicago: University of Chicago Press.
- Nosco, Peter (1990): *Remembering Paradise: Nativism and Nostalgia in Eighteenth-Century Japan*, Harvard-Yenching Institute Monograph Series v. 31. Cambridge: Harvard University Press.
- Ortolani, Benito (1964): *Das Kabukitheater - Kulturgeschichte der Anfänge.* Tōkyō: OAG.
- Pauly, Karl Ulrich Wolfgang (1985): *Ikkō Ikki (1465-1585). Die Ikkō-Aufstände und ihre Entwicklung aus den Aufständen der bündischen Bauern und Provinzialen des japanischen Mittelalters.* Bonn: Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität (Diss.).
- Rozman, Gilbert (1973): *Urban Networks in Ch'ing China and Tokugawa Japan.* Princeton, N.J.: Princeton UP.
- (1974): Edo's Importance in Changing Tokugawa Society. In: *The Journal of Japanese Studies* 1 / 1 (Winter): 91-112.
- (1989): Social Change. In: Jansen (ed.) 1989: 499-568.
- Rubinger, Richard (1982): *Private Academies of Tokugawa Japan.* Princeton, N.J.: Princeton UP.
- Rütermann, Markus (1996): *Das Dorf Suganoura und seine historischen Quellen. Untersuchungen zur Genese einer zentraljapanischen Dorfgemeinde im späten Mittelalter*, Mitteilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens v. 126, Hamburg: OAG.
- (1997): Das Prinzip der Majorität (tabun) im japanischen Mittelalter. In: *Saeculum. Jahrbuch für Universalgeschichte* 48 / 1: 21-71.
- (1999): Pflege und Kritik der "Tradierungen" (denju). Zum Verhältnis zwischen Tradition und Strukturwandel der Öffentlichkeit im Japan der frühen Neuzeit. In: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens / Hamburg* 165-166: 45-144.

- Ruiz-de-Medina, Juan, ed. (1995): *Documentos del Japón 1558-1562*, Monumenta Historica Societatis Iesu v. 148. Rom: Instituto Histórico de la Compañía de Jesús.
- Schneider, Roland (1990): Der Osaka-Dialekt. In: Institut für Asienkunde / Seminar für Sprache und Kultur Japans, Universität Hamburg (ed.) 1990: 118-121.
- (1993): Gesellschaftsspiele - Gesellschaft als Spiel? Das Shichijūchiban-shokunin-utaawase. In: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* / Hamburg 151: 7-16.
- ; Vollmer, Klaus; Christine Mitomi, eds. (1995): *Gedichtwettstreit der Berufe. Eine japanische Bildrolle aus der Sieboldiana-Sammlung der Ruhr-Universität Bochum*. Edition, Übersetzung und Kommentar, Acta Sieboldiana v. 5. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Seidensticker, Edward (1983): *Low City. High City. Tokyo from Edo to the Earthquake: How the Shogun's Ancient Capital Became a Great Modern City, 1867-1923*. New York: A.A. Knopf.
- Sheldon, Charles David (1958): *The Rise of the Merchant Class in Tokugawa Japan, 1600-1868*. Locust Valley, N.Y.: Association for Asian Studies.
- Shively, Donald H. / McCullough, William H., eds. (1999): *The Cambridge History of Japan* v. 2, *Heian Japan*. Cambridge: Cambridge UP.
- Smith, Henry D. II (1978): Tokyo as an Idea: An Exploration of Japanese Urban Thought Until 1945. In: *The Journal of Japanese Studies* 4 / 1 (Winter): 45-80.
- Stein, Michael (1997): *Japans Kurtisanen. Eine Kulturgeschichte der japanischen Meisterinnen der Unterhaltungskunst und der Erotik aus zwölf Jahrhunderten*. Tōkyō: OAG / München: iudicium.
- Thonak, Otto (1944): *Über den Ideengehalt der japanischen Herzenslehre und die Organisation der auf sie gegründeten Volkserziehungsbewegung*. Berlin: Philosophische Fakultät der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin (Diss.).
- Tucker, John Allen (1989): *Itō Jinsai's Gomō jigi and the Philosophical Definition of Early Modern Japan*, Brill's Japanese Studies Library v. 7. Leiden et al.: Brill.
- Uozumi, Masayosi (1982): *Die japanische Stadt im Übergang vom Mittelalter zur Frühneuzeit*. Berliner Beiträge zur sozial- und wirtschaftswissenschaftlichen Japan-Forschung: Occasional Papers No. 21. Berlin: Freie Universität.
- Vollmer, Klaus (1994): Die Begriffswelt des Marginalen im mittelalterlichen Japan. Zum Problem der Klassifizierung gesellschaftlicher Randgruppen und ihrer Bezeichnungen. In: *Oriens Extremus* 37 / 1: 5-44.
- (1995): *Professionen und ihre "Wege" im mittelalterlichen Japan. Eine Einführung in ihre Sozialgeschichte und literarische Repräsentation am Beispiel des Tōhoku'in-shokunin-utaawase*, MOAG v. 120, Hamburg: OAG.
- Wakita, Haruko (1975): Towards a Wider Perspective on Medieval Commerce. In: *The Journal of Japanese Studies* 1/2 (Spring): 321-345.
- /Hanley, Susan B. (1981): Dimensions of Development: Cities in Fifteenth- and Sixteenth-Century Japan. In: Hall et al. (eds.) 1981: 295-326.
- /McClain, James L. (1981): The Commercial and Urban Policies of Oda Nobunaga and Toyotomi Hideyoshi. In: Hall et al. (eds.) 1981: 224-247.
- Weber, Max (1972): Nichtlegitime Herrschaft (Typologie der Städte). In: id., *Wirtschaft und Gesellschaft*.

- Grundriß der verstehenden Soziologie*. Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck): 727-814.
- Wheatley, Paul / See, Thomas (1978): *From Court to Capital. A Tentative Analysis of the Japanese Urban Tradition*. Chicago: University of Chicago Press.
- White, James W. (1995): *Ikki. Social Conflict and Political Protest in Early Modern Japan*. Ithaca/London: Cornell UP.
- Wintersteen, Prescott B., Jr.: The Early Muromachi Bakufu in Kyoto. In: Hall/Mass (eds.) 1988: 201-209.
- Worm, Herbert (1990): Osakas Stellung als Handelsmetropole der Tokugawa-Zeit. In: Institut für Asienkunde/Seminar für Sprache und Kultur Japans, Universität Hamburg (ed.) 1990: 35-54.
- Yamamura, Kozo (1973): The Development of the Za in Medieval Japan. In: *Business History Review* 47 (Winter): 438-465.
- (1990): The Growth of Commerce in Medieval Japan. In: id. (ed.) 1990: 344-395.
- , ed. (1990): *The Cambridge History of Japan v. 3, Medieval Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yazaki, Takeo (1968): *Social Change and the City in Japan*. Tōkyō: Japan Publications.
- Zöllner, Reinhard (1997): Die Ējanaika-Bewegung von 1867 / 68. In: *Rituale und ihre Urheber. Invented Traditions in der japanischen Religionsgeschichte*, ed. Klaus Antoni, Hamburg: Lit 1997: 105-126.
- (2000): Ējanaika. Visionen und Visualisierungen. In: Kohsaka / Laube (eds.) 2000: 121-145.